阿賀町立津川小学校
関田　有佑（26 年度）

２年生における攻守連携型ゲームの単元開発
～２年生での既習を生かし、３年生での実践へ～

主張

２年時に児童の実態に即した攻守連携型ゲームを実施し，ネット型ゲームの素地を育むことで，３年生のネット型ゲームで児童がゲームに意欲的に参加することを目指す。

１　テーマ設定の理由

現行の学習指導要領 [1] では，中学年にバドミントンやテニスなどのネット型についての例示が示され，低学年でもボールゲームの内容の中でネット型のゲームの素地を育むことが求められている。しかしながら，私の実践を振り返ると，児童がネット型ゲームの動きの素地を獲得し，次の学年でゲームに生かすための学習ができていたかは疑問である。

本学級の児童の実態から，テニスやバドミントン，バレーボールなど空間を移動するボールの操作やラケットの扱いは技能的に難しい。このことがネックとなり，授業内でゲーム中に自分がどう動けばよいか分からず，授業に参加しづらい要因になると考えられる。そのため，技能面で考慮をしないと，ネット型を基にしたゲームの実践が行いづらい。村井は，にんコロボール [2] の実践で，平面で動くボールを，アンダースローによって得点を目指す，技能面を簡易化したゲームで成果を上げている。

そこで本実践では，２年時に村井 [2] の実践を参考にした，中学年への移行をスムーズに行うことを目指した，２年生におけるネット型ゲームの単元開発を行い実践する。そして，３年時に鬼澤ら [3] の実践（プレルボール）を参考にしたネット型ゲームを行う。その際，児童の実態に即した簡易化されたゲームを実施し，その有効性を検証することを目的として本主題を設定した。

２　実践の内容と方法

（１）　実践の内容

①　本単元で設定するネット型ゲーム

２年時には，村井 [2] の実践を参考にして，中央に張られた紐の下にボールを転がしながら，相手のゴールゾーンの中に入れて得点することを目指す，“ころころシュートゲーム”を設定する。

また，３年時には，鬼澤ら [3] の実践を参考にして，中央に張られた紐を境にして，自陣でワンバウンドするボールでやり取りをする，“アタックシュートゲーム”を設定する。

本単元におけるルールついては，表１の通りである。

表１　ゲームでの主なルール

【ころころシュートゲームの主なルール】	
・最初の攻めはジャンケンで決める。	・攻めはボールを持っての移動はできない。
・攻めは何度パスをしてもよい。	・１チーム４人，１セット２分間，ペアを変えて２セット目を行う。
・中央の線の下を転がるボールを投げる。	・コート奥のゴールゾーンをねらいその数を競う。
【アタックゲームの主なルール】	
・最初の攻めはジャンケンで決める。	・攻めはボールを持っての移動はできない。
・攻めは２回以上パスをしてもよい。	・１チーム４人，３対３のゲームを行う。
・失点した場合はローテーションをする。	・自コートにワンバウンドするボールを投げる。
・相手のコートにボールが着いたら得点。	

（２） 実践の方法

① 評価方法

ゲーム中の発言や振り返りの内容などから授業内での抽出児Ａ児とＢ児の変容と，Ａ児の所属するチームの発話の様子を記録する。また，高橋[3)]の形成的授業評価とＡ児とＢ児が所属するチームのゲームでの様子からその変容を見取っていく。

② 実践の対象

令和６年度　Ａ町立Ｔ小学校　第２学年　24 名（男子 15 名　女子９名）

令和７年度　Ａ町立Ｔ小学校　第３学年　24 名（男子 15 名　女子９名）

３ 授業の実際

（１）２年時のころころシュートゲームから

① 縦に広いコートを体験し，場について話し合う（３・４時間目）

児童の縦の動きを引き出すために，コートの奥にゴールゾーンを設定した縦に長いコート（図１）を準備し，２対２のラリー形式のゲームを行った。授業の終盤の全体共有の場面では，「ゴールが遠すぎて点が取れない。」「ゴールが遠いとボールの勢いが弱くなって点が取りにくい。」などの意見が多く見られた。得点の喜びをより多く味わさせるために図２のように場の設定を変更した。なお，ルール変更についての発言や振り返りはなかった。

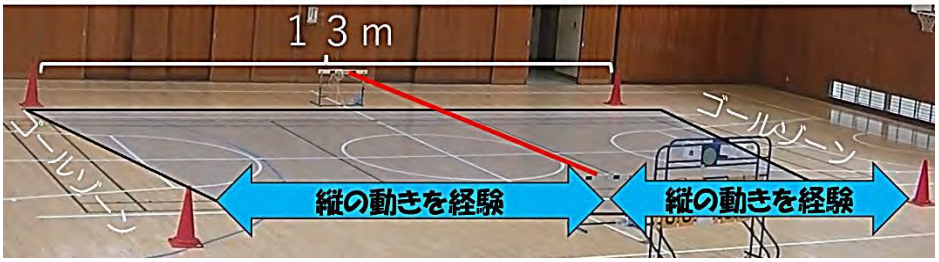

図１　３時間目に設定した縦に広いコート

図２　４時間目に設定した横に広いコート

② ゲームを通して変容するＡ児とＢ児（５～７時間目）

５時間目には，同じ作戦と動きで得点を重ねていたＡ児とＢ児だったが，６時間目からシュートを打つＡ児が守られる場面（図３）が多くなる。Ａ児とＢ児は，Ｂ児がシュートを打つことで，得点を得ようと話し合う様子（表２）が見られた。

図３　６時間目に対応されるＡ児

表２　６時間目のＡ児とＢ児の会話

Ａ児：	強いってみんな分かっているから，強い人のことを守る。（だから）他の人（Ｂ児が）がシュートを決めた方がいいと思う。
Ｂ児：	（僕が）シュートしたりとか，バウドパスしたりとかする？
Ａ児：	Ｂさんが（シュートを）打った方が多分（いいかも）…。

７時間目に，６時間目の話し合いを生かしてＡ児がパスの役割，Ｂ児がシュートの役割を担いゲームに臨んでいた。ゲームの中で，『守りを惑わすための移動』『シュートとパスの選択』『ゲーム中のペアへの指示』『シュートを打てる所への移動』『人のいない所へのシュート』（図４）とボールを持たない時の動きや思考の表出が見られた。

Ａ児とＢ児のペアは７時間目に行った動きを「ゆうどうさくせん」と名付け，お互いに共有していた。

図４　「ゆうどうさくせん」の様子

（２）３年時のアッタクシュートゲームから

①　２年時の作戦カードからやってみたい動きを選びチームで話し合う（４時間目）

１～３時間目につなぎっこゲームとアウトナンバーのゲーム，縦に広いコートでゲームを行った後，　４時間目に横に広いコートでゲームを行った。４時間目から２年生までの作戦カードの蓄積を児童に示し，自分のネームカードを晴らせてから話し合いに参加させた。図５の通り，23 名中，16 名が昨年度の作戦を選び，４名の児童が違う作戦を，３枚の児童が作戦を選ぶことができなかった。その後のＡ児の所属するきょうだいチームの話し合いでは，表３の様に作戦カードを基にして話し合いをする様子が見られた。

表３　４時間目のチーム内ミーティング

Ｔ	：ゲームでどんなことができる？
Ｅ児	：みせかけでアッタクする人は？
Ａ児	：はい！俺得意だからやるよ“
Ｆ児	：みせかけ(パス)の人は？
Ｂ児	：はい、はい。俺パスなら得意

②　今までの動きを生かしてリーグ戦で勝利を目指す（５・６時間目）

５時間目からきょうだいチームを２つに分けたリーグ戦を行った。５時間目の始めに前時で守りに着目した児童振り返りを紹介し，守りに視点を与えて話し合いを行わせた。Ａ児の所属するきょうだいチームの話し合いでは，表３の様に得点力のある子への守りの話し合いがなされた。また，６時間目には，作戦カードを選ぶ活動で，18 名が昨年度の作戦を選び，６名の児童が違う作戦を選び，24 名全員が自分の考えをもってチームでの話し合いに臨むことができた。

図５　児童が選んだ作戦カード

表４　６時間目のチーム内ミーティング

Ａ児	：○○さんをマークしないと。
Ｂ児	：○○さんはすきま投げをやってきそうだよ。勢いよく投げてくるからジャンプして防いでみようよ。
Ｆ児	：前に張り付いて守れば？
Ｃ児	：広がって守ってみる？
Ｅ児	：俺たちが敵役やるからやってみようぜ

４　考察

２年時の形成的授業評価（図６）では，５～７時間目で成果の項目での数値の増減が見られた。Ａ児とＢ児は６時間目に他のチームから対応され，思ったような成果が得られないことから，「ゆうどうさくせん」を考案し，ゲームの中でその動きを実施し，一定の成果を得ている。また，２・３年時のどちらの形成的授業評価（図６，７）も意欲の数値がどの時間でも 2.9 以上を示し，児童が意欲的に活動に参加することができている。さらに，どちらの協力の数値も終末に向けて通して上昇した。授業記録から，チーム内ミーティングでの発話が多くなっていることから，活発な話し合いがなされ，協力の数値の上昇が見られたことが考えられる。

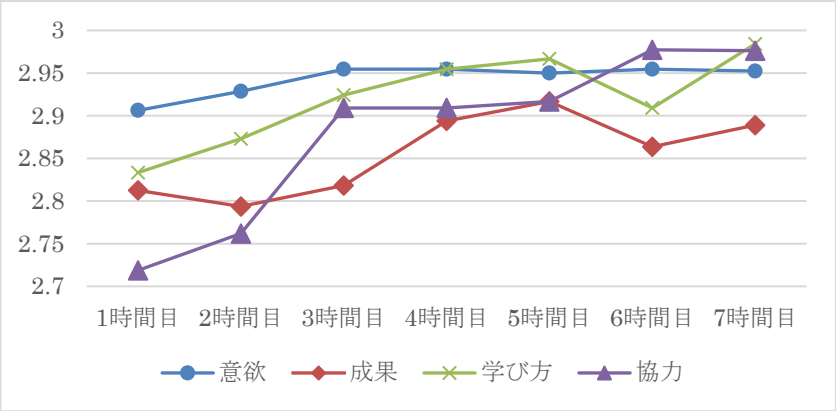

図６　２年時の形成的授業評価

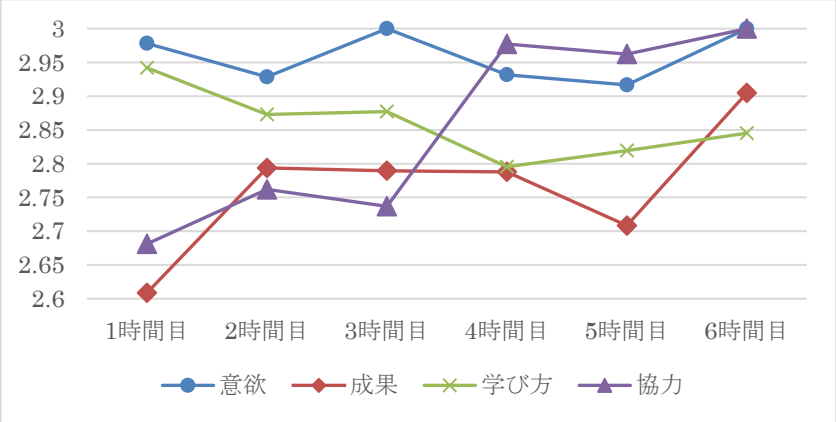

図７　３年時の形成的授業評価

これらのことから，簡易化したゲームとシンプルなルールが，本学級の児童の実態に適していたからこそすべての児童がゲームに参加し思考しながら，自分のやってみたい動きの獲得に向けてゲームに取り組めていたと考える。

４　成果と課題

（１）　成果

ゲーム中心の活動が，児童のこんな動きをやってみたいという思いを高め，ゲームで表現する姿につながった。また，２年時の作戦カードを生かした単元構成が児童の意欲を引き出し，主体的に活動に参加することができた。

（２）課題

３年時の“アタックシュートゲーム”で使用したボールと，提示した「２回以上のパス」というルールに改善が必要である。ボールをよく弾み軽いボールにし，パスの回数を３回とすることで，より児童が意図的な連携を意識してゲームに臨めたと考える。

５　引用文献

1）文部科学省『小学校学習指導要領　体育編』2017
2）村井利家『楽しい体育授業』明治図書,2023,P40-41
3）鬼澤陽子・小松崎敏『小学校高学年のアタックプレルボール授業における攻撃パターンからみた三段攻撃の学習可能性の検討』群馬教育大学,第 38 号,2021,P189-198
4）高橋健夫・長谷川悦示・刈谷三郎『体育授業の「形成的評価法」作成の試み子どもの授業評価の構造に着目して』，体育学研,第 39 号 1994,PP 29−37